

灰の水曜日の説教

金 大烈 神父 2010年2月17日(水)

《四旬節を迎える態度》

こんばんは

ちょっと面白い話から始めます。

ある金持ちが死んで神様に会いました。神様の顔を見たときに、この金持ちはしつこくせがみます。何をせがんでいるのか聞いてみますと、「私は世の中に、沢山の財産を残してこちらまで来たのですが、その財産を持ってくれば、この天国でも役に立つと思います。だから私の財産を取りにもう一度行かせて下さい。」と頼んだわけです。あまりにもしつこくせがみましましたので、神様は、やむを得ず、しょうがなく「いいよ」と承諾しました。「お前の持っている財産を唯一つのカバンに入る分だけ許す」と神様はその金持ちに一つの条件を出しました。「分かりました」と言って帰って行った金持ちは、「神様もあまり賢くないね」と思いながら、自分の財産を全部売って金塊に変えました。そして、その金塊を大きなカバンに入れてみると、全財産がちょうど一つのカバンに入りました。それを持ってまた神様の前に行こうとしました。ところが天国には門があって、そこには使徒ペトロが待っていたのでした。「あなたは何を持って来たのです？ ここは物を持って入れる所ではないのですよ。」とはっきり言われました。しかし、金持ちは「私は、御父から許しを頂いてこのように、カバン一つを持って来たのですよ。」そのように言われて使徒ペトロも、神様がお許しになったそのカバンの中に、何が入っているのか少し気になって、「ちょっと見せてほしい」と言いました。金持ちは「はい」と言って誇らしく、そのカバンを開けて見せました。その金塊を見た使徒ペトロは、深いため息をついて「何でこんな重い物を持ってきたの、これはね、天国では道路を舗装するときレンガとして使っている物で、それ以外は使えない物ですよ。」

誰が作った話か分かりませんが、これを読んだ時に結構笑いました。結局、私達は天国には何も持っては行けませんね。そうでしょう。全部捨てて、この肉体さえ置いたまま、霊魂だけ私達は神様に会いに行きます。

四旬節に入った私達がもう一度考えなければならない事は、“私達の霊魂はどんな状態にいるのか、どんな状態で、私達はこの霊魂を準備しているのか”という事です。“四旬節は霊魂を、魂を浄化させる、清める期間”じゃないかと思えます。ですから、色々な悔い改め、回心、償い、それらも全て自分の霊魂を生かすために、浄化するために、清めるためにするものではないかと思ってみました。

今日、第一朗読(ヨエル2・12-18)でヨエル預言者を通して神様はこのようにおっしゃっています。
『衣を裂くのではなく、お前達の心を引き裂け。』

ということは、やっぱり、私達が何よりも大事にしなければならないものは、私達のこの“霊魂、魂”だということでしょう。ある意味で私達の“人生そのもの自体が四旬節”じゃないかと思えます。

いつも復活を待ち望むその心を持って、自分のことをよく振り返ってみながら、できるだけ清められた心を保ちながら、この世を過ごそうと、迎えようとする心が必要じゃないかと思ってみました。

とにかく、教会の典礼は、今日（灰の水曜日）から四旬節という期間を定めています。私達はその定められた期間に入って、どうすれば四旬節の基の意味を理解し相応しく過ごせるかを考えなければなりません。

皆様、私も皆様も、色々な面でちょっと足りない所があると思います。

「こんな状態で神様に呼び掛けられたら……」と気になる所があると思います。そういう面も清めようと、そして清めるためには何が必要かと考えて、実践する恵みを頂けたら、この四旬節、素晴らしい四旬節になると私は固く信じます。

私達はこれから灰を頭にかけます。灰をかける風習が出来てから、今、日本では「回心して福音を信じなさい」と司祭が口にする言葉ありますが、「あなたはちりであり、ちりに帰りなさい。ちりに帰ることを思い出しなさい。」という言葉が司祭が唱えながら灰をつける場合もあります。どちらかと言えば「ちりに帰りなさい」と言いながら灰をつけるべきだと私は思います。

さあ、私達の故郷、誰でも行かなければならない所、その所を私達が黙想できればいいのではないかと思います。

皆様、今日の福音（マタイ 6・1-6）ではイエス様が『施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。』と、このようにおっしゃったのですが、私はこれを読んでイエス様に文句を申し上げました。ちょっと見せてもいいから、施しをする人が沢山増えてほしいのです。少し人に見せようとする心があっても、善い事を沢山する世の中になってほしいのです。誰の前でも自信を持って、十字架をきる人々が沢山増えてほしいのです。

皆様、もちろん私達は右の手のすることを、左手が分からないようにしなければならない場合もあります。しかし、人々の前で堂々と見せなければならない事もあります。あまりにも気にしすぎて、善い事さえ避けてしまうことになれば、今日イエス様が福音でおっしゃっている意味、その基の意味も失う結果になると思います。

皆様、善い事を沢山なさって下さい。善行を人に見せようとする心、それは子供っぽい話です。実際にある意味では、奉仕という言葉は私達には相応しくない言葉です。私達は生きるためにする方法です。当たり前自然に心から出る振る舞いです。何故そういうことに奉仕という名をつけて奉仕、奉仕と言うのでしょうか。私はこれをやったらやりがいを感じ、喜びを感じるからするのです。そして、私が手を伸ばしたら相手はどうにか癒され、助かり、そのことによって幸せになっている顔を見たら、私も幸せになれるという体験があるからするのです。皆様、私達はやりがいを創りながら生きて行きます。それがなかったら、家族も兄弟も、友達も、信者同士も、多分意味を失うと思います。

この四旬節、どういう機会が皆様に与えられるのか分かりません。多分、あらゆる事、全ての時間は皆様が善いことをするための機会、チャンスになると思います。ただ、空しく過ぎてしまうのか、

それを集中して「なんとかしよう、応えよう」とするのか、それは私達がしなくてはならない決定じゃないかと思います。

今日からの四旬節、幸せになりましょう。善いことを沢山行って幸せになりましょう。イエス様が、断食している顔をかくして『頭にあぶらをつけなさい』(マタイ6・17)とおっしゃった意味が、そこにあるのではないかと思います。喜びましょう。それが、“積極的に四旬節を迎える私達の望ましい態度”ではないかと思ってみました。

ありがとうございます。